

失われた民主主義——メンバーシップからマネージメントへ

Diminished Democracy by Theda Skocpol
Copyright ©2003 by the University of Oklahoma Press
Japanese translation rights arranged with the University of Oklahoma Press
through Japan UNI Agency, Inc., Tokyo.

ビルとマイケルに

民主的な国家では、いかにして人と結び合うかを知ることが基本的な知恵であり、ほかのすべての進歩はその進歩に依存する。

民主政治は国民にもっとも有能な政府を提供するものではない。だがそれは、もっとも有能な政府がしばしばつくり出しえぬものをもたらす。社会全体に倦むことのない活動力、……とエネルギーを行き渡らせるのである。こうした活力は民主政治なしには決して存在（しないのである）。

政治は数多くの結社を生ぜしめるだけでなく、巨大な結社をつくり出す。社会生活においては、一つの利害関心が、多数の人間を自然のうちに一つの共同の行動に惹きつけることは稀である。……政治においては、……結社の普遍的価値が明らかになるのは、大結社の場合において他にない。……政治的結社は多数の人々を一時に自分の殻からひき出す。年齢や頭脳や財産によって本来はどんなにかけ離れていようと、……ひとたび相見れば、再会の術は常にある。……

政治的結社は授業料のない偉大な学校であり、そこに来て国民の誰もが結社の一般理論を学ぶものとみなすべきである。

まえがき ix

序文と謝辞 xi

第1章 ウォレン・ダージンの墓石——アメリカにおける草の根民主主義

1

市民世界の変貌／ 合衆国における草の根民主主義の高まりと変貌

／ 本書の見取り図

第2章 いかにして合衆国は市民共同体となったのか 17

「小さいことは美しい」——今日の多くが受け入れている物の見方

／ ボランティア主義と民主的共同体の建設／ 古い見方への新証

拠／ アメリカにおけるボランティア主義の起源／ 市民共同体と

してのアメリカの近代化／ 自発的連合体の急増／ 二〇世紀にお

ける市民社会／ ボランティア主義と民主的ガバナンス

第3章 ^{ジョイナ}結社好き、組織者、市民 63

メンバーシップの意味／ 組織者を入会させる組織者／ 民主的市

民精神への道筋／ 回顧と展望

第4章 メンバースhipからマネージメントへ 109

古い連合体と新しい社会運動／アドボカシーの噴出／アドボカシー時代のメンバースhip集団／一変した市民世界

第5章 なぜ市民生活は変化したか 149

社会的慣習からの解放と市民世界の変貌／政治的機会と結社の変化／結社建設の新しいモデル／トップの変化／改造された市民生活

第6章 我々は何を失ったのか 187

トップダウンの市民世界／失われた民主主義／二〇〇一年の〈9・11〉以後の市民性復興か

第7章 アメリカ市民社会の再構築に向けて 217

有害な対策／草の根民主主義の新しいモデル／メディアと民主性復興／ナショナルな政治の改革／アメリカの失われた民主主義の再興

索引 1
註 11
訳者あとがき

- 一、本書は Theda Skocpol, *Diminished Democracy: From Membership to Management in American Civic Life* (Norman: University of Oklahoma Press, 2003) の全訳である。
- 二、原則として、諸符号の転記は慣例にしたがう。すなわち、() ↓ () 、 : : ↓ 「」。
- 三、原語の読みをカナ書きする場合にはなるべく原音を尊重する。
- 四、原文においてイタリック体で強調されている部分は、訳では傍点を付している。
- 五、エピグラフのトクヴィルの言葉の翻訳に際しては、岩永健吉郎・松本礼二訳『アメリカにおけるデモクラシー』（研究社、一九七二年、一一〇頁、一一三頁、一一四頁）および、松本礼二訳『アメリカのデモクラシー…第一巻（下）』（岩波書店、二〇〇五年、一三七頁）を参照した。記して感謝する。

まえがき

素晴らしい多くの出来事が私の人生で起こったが、オクラホマ大学にカール・アルバート連邦議会調査研究センターを設立したことほど、私が誇らしく思うものはない。また、同センターのジュリアン・ロスボーム特別記念講義における講演ほど満足のいくものはない。このシリーズは、ジュリアン・J・ロスボームを記念して、イレーヌ夫人と御子息のジョエル・ジャンコウスキーが創設した、オクラホマ大学の恒久基金によるプログラムである。ジュリアン・J・ロスボームは、オクラホマ南東部で過ごした少年時代以来の私の親友であるが、同氏は、オクラホマ州の公的諸事の長きにわたる指導者である。ロスボームは、オクラホマ大学の理事を二期務め、州高等教育評議員も歴任した。一九七四年、彼は、大学の最も名誉ある特別有功章表彰を受賞し、また一九八六年、オクラホマ州聖堂に加えられた。

ロスボーム講義シリーズは、代議政治、民主主義と教育、公共的事柄への市民参加といったテーマ、すなわちジュリアン・J・ロスボームが生涯にわたってコミットしてきた価値に捧げられるものである。生涯にわたるロスボームのオクラホマ大学、オクラホマ州、そして祖国アメリカへの献身は、ロスボーム講義シリーズが捧げられる理想への尊敬の徴である。このシリーズの一卷である本書は、アメリカ民主主義の理解に永続的な貢献をするものである。

序文と謝辞

すべては一九九〇年代半ばに始まった。当時、私は、ある直感を突き止めようと、仲間とともに小規模な研究チームを組織した。その直感とは、研究者や評論家が想定しているよりも大規模で、地元を越えた自発的なメンバーシップ結社が、昔のアメリカには存在していたのではないかというものであった。今日のアメリカの民主的健康さについての議論は、過去についての誤った仮定に基づいているのではないか。そうした考えが頭をよぎったが、確信は持てずにいた。当初は、研究費もほとんどなく、我々の小さな研究グループは、合衆国の歴史上現れた最大規模の自発的結社について、資料に裏付けられた一覧と詳細な事実を明らかにするために発足したが、この時には、この作業は二、三年もあれば終わりそうだ（あるいは、これらの巨大結社のうちどれ位の数がかつて実在していたのだろうか）などと考えながらのスタートであった。何年か後に、ハーバード大学の「市民的積極参加に関するプロジェクト」は、会員数が合衆国史上一度でも成人人口の一パーセントを超えたことがある巨大なメンバーシップ結社が、六〇団体ほどあることを突き止めた。それまでに、私と研究仲間は、継続中の一群の調査に関わっており、数多くの種類の自発的結社を規模の大小に関係なく、その出現と成長の軌跡をたどっていた。アメリカにおいて変貌する草の根ボランティア主義の形を——異なったタイプの組織の興亡というレンズを通して——理解することにとりつかれていた。

以上のことからわかるように、私は長い期間にわたって、協力者の顔ぶれは変わりはするものの、いつも素

晴らしい同僚諸氏、大学院生、学生とともに合衆国の自発的結社に関する数多くの調査に光栄にも携わってきたハーバード大学の「市民的積極参加に関するプロジェクト」の共同研究者と私は、驚くほど多くのことを知っただけではない。過去の豊かなアメリカ民主主義について、これまで見失われてきた、あるいは軽視されてきた断片を追跡する歴史探偵の役を大いに楽しむことができた。我々は、ハーバード大学のワイドナー図書館はもちろん、学外のいろいろな場所を飛び回った。考証中である自発的結社の多くの役職者（年配者が多いが）に助力をいただくことができ、そのおかげ大規模な自発的結社の記録を掘り起こし、非常に興味深い歴史について学んだ。こうした結社には、今日の高等教育機関の中心においてはほとんど耳にしないような団体が多く、たとえばオッド・フェローズやグッド・テンブル結社からグレンジ、婦人クラブ総連合、そして東方の星、忠節なるムース結社などがあった。かつて高等教育を受けたアメリカ人が、こうした階級横断的な自発的連合体の一員であったり、指導者であった可能性があるのだ。今では多くの人は、こうした結社のことについて知識がない——そして、このことは、アメリカの草の根ボランテニア主義の変容する形態についてこの調査から我々が学んだ話の一部でもあるのだ。

私は、こうした努力における最も親しい協力者として、マーシャル・ガンツ、ジアド・マンソン、ジェニファー・アーザー、ベイルス・キャンブ、ジョスリン・クローリー、ラッチェル・コブ、ケイシー・クロフスタッドの諸氏に特に感謝したい。ほかの多くの方々も同様に、「市民的積極参加に関するプロジェクト」に研究チームの一員として、あるいは調査データの入手者、あるいは遠方からデータの分析者として重要な貢献をいただいた。以下の方々の名前を書かせていただくのは私の喜びである。ルース・アーギレイラ、デヴィッド・アール・アンダーソン、グレン・ベスマー、クリスチャン・ブルネリ、サンディ・チャン、スーザン・クロフォード、ジュリアン・ディカット、アン・マリー・フロウリズ、クリスティン・ゴス、ジュリア・グリーン、ジャナ・ハンセン、

アンドリユー・カーク、オリット・ケント、マイヤー・ケスツンバウム、アリアン・リアズス、シヨーン・マツキー、レジーナ・マーカード、ロバート・ミツキー、ジジ・パリス、アニータ・レントン、ジュリア・ラビン、エリザベス・リビキー、キャメロン・シエルドン、アンドレア・シエパード、ブライアン・シリングロー、デヴィッド・シーウ、マイケル・スヴァーズ、ジュリアンヌ・アンセル、カレイヴァニ・サンカラパンディアン、ミランダ・ワーセン、クリステイヌ・ウオイシユナー。このリストから漏れている方がいるかもしれない。その方々にはご寛恕をお願いする次第である。

合衆国の自発的結社の歴史について、各氏の調査データを使わせていただいた、デヴィッド・ベイト、デヴィッド・フェイイ、ジェラルド・ガムおよびロバート・D・パットナムの各氏には深謝したい。また、多くの古文書保管人、結社所属の史家、自発的結社の役職者、また特定の結社を研究している市井の研究者には特に感謝したい。私や共同研究者が、会員の傾向や結社の歴史を調べるにあたって、大いに助けていただいた。たとえば、マサチューセッツ州クインシーのピシアス騎士団の最高秘書官アルバート・サルツマンは、小さなオフィスから外に出て働いているが、我々が何度もお邪魔したにもかかわらず、その度に快く受け入れてくださり、オフィスに保管されている何箱もの古びたボックスから宝物のような文書の自由な閲覧をお許しいただいた。また、東方の星の本部ワシントンの総大秘書官ベティ・ブリグズを訪ねたことがあるが、訪問後、彼女は親切にも一八七六年から三年毎に出されている報告書一揃を、「市民的積極参加に関するプロジェクト」とハーバード大学の図書館に寄贈してくださった。こうした特筆すべき重要な方々以外にも、以下の方々には大変お世話になった。記して感謝したい。ビルとジニー・ピーティ（婦人キリスト教禁酒同盟）、ジョアン・ベンソン（小児麻痺救済募金）、スーザン・ブロスナン（コロンブス騎士団）、クリス・コーブル（クリスチャン・エンデヴァアを研究中）、ジョン・コンキヤノン（古ヒベルニア団）、ロバート・コックス（米国在郷軍人会）、ジュリー・クルーデル（グリーンピース）、

ダグラス・フレイザー（全米自動車労組）、エドナ・グラス（インディアアン向上同盟およびボカホンタスの娘たち）、エイブラハム・ホルツマン（タウンゼント運動を研究中）、マイク・ケリー（エルクス慈善保護会）、ジェーン・キングマン（米国赤十字）、ジャニス・クラウン（ルター派救済会）、エイモンド・ロダート（環境保護団体を研究中）、ジャネット・マーン（聖堂会）、ステイーブン・モロー（独立オッド・フェローズ結社、マサチューセッツ州）、ウィリアム・ムアー（メーソンを研究中）、グレッグ・ネイゲル（ボーイスカウト）、ヴァーン・ポール（海外従軍軍人会）、ロバート・プラウドリー（メーソン奉仕団）、ジョー・ライリー（マサチューセッツ・キリスト教連合）、ボブ・レイノルド（米国労働総同盟産別会議「AFLCIO」）、アンソニー・シュナイダー（全米友愛会議）、シンシア・スワンソン（婦人クラブ総連合）、マーク・タバート（国民的遺産付属博物館）、ロジャー・J・タルバート（全米グリーンジ）、バーバラ・ヴァイツァー（女性国際ボウリング協会および米国ボウリング協会）、ブライアン・ウィリアムズ（米国赤十字）、ジョイス・ライト（ピシアスの姉妹）、ロバート・ジーガー（産別会議「CIO」を研究中）。調査に御協力をいただき感謝します。完全を期したつもりだが、一部の方の名前が落ちているかもしれない。失礼があればお詫びしたい。

本書はまた、古物収集家や米イーベイ・インターネットオークションの世界で発見した新しいつき合いの恩恵にも浴すことができた。フロリダとニューヨークのジム・バーケルからは、珍重な普段は目にできない会員バッジを譲ってもらった。コロラドのジム・ダヴェンポートは、ウッドメン友愛会の写真や「事実」を提供してくださった。また、ミズーリのジョン・カーンズは、珍しい友愛会の儀式的原稿を提供してくださった。三氏には感謝申し上げる。

著書というものは、パソコンと向き合う執筆者のみでは決してできあがるものではない。度重なる知的邂逅——専門家の会議で、リサーチワークショップの中で、また客員講義の間の——から生まれるものでもある。本

書は、オクラホマ大学カール・アルバート・センター主催の一九九九年秋の一連のロスボーム講義として始まった。当時、センター長は、ロン・ピーターズであった。ロンおよび氏の同僚諸氏に対して、オクラホマ大学滞在中の心温まる素晴らしい歓待に感謝申し上げたい。この時に、オクラホマ大学総長デヴィッド・ボーレンだけでなくジュリアン・ロスボームとジョエル・ジャンコウスキーにも光栄にもお目にかかることができた。私は、講義が終わった後、州内のあちこちを旅し、本書執筆に利用した古い文書の一部を見つけることもできた。

オクラホマでの講義の後先に、ここには一々書ききれないほど多くの場所で、本書に関する議論や証拠の種々の側面について発表する機会を得た。ヨーロッパからカリフォルニア、そして合衆国の中心地。参集いただき、私の話に耳を傾けてくださったすべての聴衆者に感謝します。そこでの質問やコメントは、本研究を進める上で大いに役立った。特に、ハーバード大学アメリカ政治研究ワークショップには感謝したい。そこへの参加者とのやり取りは、本書で具体化された着想を磨き上げるのに何度ともなく役立った。多くの友人や同僚諸氏が、この仕事に対して個人的な支援や知的激励を与えてくれた。特に、エレン・フィッツパトリック、モーリス・P・フィオリナ、エリノア・オストロム、ポール・ピアソン、シドニー・ヴァーバにはお世話になった。ロバート・D・パットナムは、有益なデータと刺激的な議論の尽きない知的源泉であった。我々二人は、いくつかの決定的な論点で意見を異にするが、二人の識見豊かな同僚が嬉々として談笑し、PTAやエルクスに関するデータを交換するような主要大学は、ハーバードにおいては無いであろう。

本書が基づく調査は、何年にもわたって多くの団体から財政的支援を受けた。その中には、バーテルズマン財団、ラッセルセージ財団、ピュー慈善信託、ジョン・D・&キャサリン・T・マッカーサー財団、そしてハーバード大学ウェザーヘッド国際問題センターおよび子ども研究プログラムが含まれている。特にフォード財団には、アメリカの市民生活に関する私の調査のいくつかの主要な側面を支援していただき御礼申し上げます。そして、

この試みの多くの局面を通じて緊密な協力を惜しまれなかった、フォード財団役員のコNSTANS・ブキャナン
の友情と知的支援には深謝したい。

オクラホマ大学出版局の他の同僚諸兄とともに、ジーン・ウアターゾウ、マリアン・J・スチュアート、シエ
イラ・バーグは原稿を書物の形にする上で主導的な役割を果たしてくださった。心から御礼申し上げる。ハーバ
ード大学の私の助手、社会学部のアビー・ペック、政治学部のアメリカ政治研究センターのリリア・ハルパン・ス
ミスもまた、多くの重要なやり方で本書に貢献してくれた。彼らのおかげで、私は同時にほかのプロジェクトを
継続することができた。

『失われた民主主義』は、私の夫ビル・スコッチポルおよび私の愛する息子マイケル・アラン・スコッチポル
に捧げたい。息子のミドルネームは、私の父、生涯を通じての南北戦争狂アラン・バロンからきている。父は、
南北戦争が主役を演じる本書が気に入ってくれるものと信じる。ビル・スコッチポルは、アメリカに関する文献・
資料に対する私の愛を共有しているし、ビルは、ウイリアム・ダージンの墓を発見し、その意味を即座に理解し
た人でもある。マイケルは、アメリカの未来——願わくば、民主主義が隆盛する未来——に我々を結びつける存
在である。

シーダ・スコッチポル

ケンブリッジ（マサチューセッツ州）にて

第 1 章

ウォレン・ダージンの墓石——アメリカにおける草の根民主主義

Warren Durgin's Gravestone — Understanding American Civic Democracy

狭く曲がりくねった道を一マイル以上下って行くと、小川に突きあたる。川辺には、木々が立ち並んでいる。我々を迎えるのは共同墓地だ。いくつもの小さな墓標が、まばらにつつ立っている。メイン州ノースラヴェルのウイリアム・ウォレン・ダージンの亡骸もここにひっそりと眠っている。この安住の地の佇まいは、人生の大半をメイン州の西のはずれに位置するケザー湖に接し、隣のニューハンプシャー州のホワイト山脈の麓に広がる丘陵地帯にきびすを接する森林地帯、一面岩の野原と小村落が点在する、この農村地帯で生を全うした——一八三九年一月一八日に生まれ、一九二九年一月二七日に死去。九〇歳という長寿であった——無骨な農民、木材切出し人監督、糸巻き職人にふさわしいものである。¹

しかし、〈ウイリアム・W・ダージン〉の墓標には驚かされる。碑文は、ひとときわ高い大きな花崗岩の石板に刻まれている。ダージンは、「エイブラハム・リンカーンの従者の一人にして、リンカーン大統領の遺骸をイリノイ州スプリングフィールドへ移送する儀仗兵」を勤め、「納骨を補佐した」、在りし日の偉大な瞬間を、碑文は物語っているのである。南北戦争中、四年間にわたって北軍に従軍した後、ダージン曹長は、棺側葬送者八人の一人に選ばれた。その中には傑出した将校のほか、「年齢や兵役期間、リンカーン大統領の遺骸を生地のイリノイ州スプリングフィールドに護衛するにふさわしい武勲を基準に選ばれた……」²四名の曹長が含まれていた。ダージンは、棺を棺台に運ぶのを補佐し、リンカーン大統領が葬られる州都スプリングフィールドまで護衛した。遺

骸を乗せた有名な特別列車は、首都ワシントンからスプリングフィールドへ、「ボルティモア、ハリスバーグ、フィラデルフィア、ニューヨーク、オルバニー、バッファロー、クリーブランド、コロンバス、シカゴ、「さらには」インディアナポリス」を悲しみにくれつつ進んで行った。ダージンは、これらのすべての出来事を、何十年も後に記者インタビューを受けた死の前年に、まだ思い出として記憶していたのだ。³

リンカーンの棺側葬送者としての軍務の顕彰だけでは、まだまだ不足であるかのように、ダージンの墓石は、ミドルネームの〈ウォレン〉として生前知られた男の所業を、数多く物語っている。生誕と死亡の年月日の下に、〈南北戦争在郷軍人会（G.A.R）指揮官〉なる文字がくつきりと刻まれている。南北戦争在郷軍人会とは、南北戦争後の北軍退役軍人の集まりであるが、彼は地元の支部長に選出されていた。さらに下に目をやると、今度はダージンが所属していた団体であろうか、〈P.O.H.〉と刻まれている。この組織は、農業擁護者会（Parsons of Husbandry）、すなわちグレンジ（農業共同組合）である。ダージンは、ノースラヴェルのケザー湖グレンジ四四〇号の一員であった可能性が高い。さらに、墓石のてっぺんには、細長い三葉のリボンが矩形に絡み合って垂れ下がっているのが見える。この種の通には一目瞭然であるが、ウォレン・ダージンは、合衆国の主要な友愛結社の独立オッド・フェローズ結社の一員であった。彼はノースラヴェルのクレセント支部二五号の一員であったのだ。⁴

私が、最初にウォレン・ダージンの墓石を思い浮かべたのは、夫のビル・スコッチポルが、西メインの田舎道をドライブ中にそれに気を止めてからのことであった。⁵ ある男の生涯が刻まれた墓石。その男への好奇心も手伝って、我々は、ラヴェル歴史協会からさらに多くの情報と手がかりを手に入れた。後に、私が、その墓石を直接見に行ったとき、ダージンの物語が、合衆国における市民の歴史のいくつくりの要素に光を当てるのか、往生した。

一つには、墓碑の光景が、私に結社に入会する意味がどれほど変化したかを十分に納得させた。何十年も後という有利な立場から、森のまだら模様の日の光を通してじっと見てみると、ダージンがエイブラハム・リンカーンの棺側葬送者としての軍務を永遠に語り継ぎたがった理由がすぐに合点できた。だが、こうした重要な戦争中の役務があれば、なぜ南北戦争在郷軍人会、グレンジ、あるいはオッド・フェローズへのつながりが加わるのか。私は、名譽なことに役職も務めたことがある申し分のない二つの学会、アメリカ政治学会（APSA）とアメリカ歴史社会科学会（SSHA）の会員であることをすぐく大事なことだとは思っているが、墓碑に、〈APSA〉、〈SSHA〉と刻んでもらうことなど想像だにできない。ウォレン・ダージンは、私にとっては、直感的にはおよそ理解しがたい市民的世界の一部であった。そうした世界では、結社の一員であることが、それ自体名譽であり、すこぶる重大な意味を持ったのだ。

ほかの考えも頭に浮かんだ。ダージンの墓をこの目で見に行く前に、私は貧しい農夫で労働者でもあるこの貧相な男が、当時最も特権的で大きな勢力を誇った自発的結社の一員であり、実際にその役員でもあった事実を理解しようとして、合衆国の自発的結社の歴史を相当調べ上げていた。南北戦争在郷軍人会、グレンジ、オッド・フェローズの名前が出てくるのはダージンの墓石だけの話ではない。一九〇〇年前後の数十年間、同種の自発的結社の名前は、メイン州選出の米国連邦上下院議員、あるいは州政府の選出公職者として仕えた実業家、裕福な農民、教育を受けた専門家の伝記紹介の中にも誇らしげに登場してくる。さらに重要なのは、同じ結社を、マサチューセッツ州のより都会風の、国際的な感じがする指導者も頻繁に引き合いに出していたことだ。事実、そうした結社の一員であることを、全米の政府内外のエリートは公に表明していたのである。

この後すぐに知るように、オッド・フェローズ、南北戦争在郷軍人会、グレンジの三つは、自発的に加入した会員が運営するアメリカ史上最大規模の最も包括的な結社であった。これらとそれ以外の多くの自発的結社が、

アメリカの連邦的に組織された共和政体からインスパイアされた市民的組織者によって創設された——本当にそのとおりであって、彼らは団体を合衆国の統治制度を模して作り上げ、全米各地に広がる大規模な連合体を創設したのだ。各地の支部は、代表を通じて州・全国組織に傘状に結びついていた。一八六〇年代の南北戦争での北軍の勝利は、自発的結社の発展にとつても一つの重要な分水嶺であった。というのも、この大きな戦争によって、ウォレン・ダージンが入会し、後に墓石を紋章で飾った団体のように、階級横断的な自発的連合体が生まれ、全国に拡大する新たな勢いを獲得したからである。

南北戦争への従軍と同時に大きな自発的結社の一員であったこと。ダージンの墓から読み取れるこれらの事実には、伝記の意味ばかりか象徴的な意味合いも持つものであった。アメリカの指導者が、志願兵や救援網を結集することで北軍を救ったときに行ったように、アメリカの最大規模の自発的結社は、階級を越えて親交を図った。これらの結社は、善良な男性／女性（また時にはグレンジの場合のように両方）を、彼らがその構成員でもある民主的共和政とそっくりの——また、それへの影響力を持つ——大規模かつ包括的な結社に集めることを目指した。その結果、ウォレン・ダージンだけでなく何百万という質素な暮らしをしている人々も、最も特権的で有力な市民を一員とする当の自発的結社に入会でき、うまくいけば役員になるのも難しくはなかった。結社に盛衰はあったものの、階級横断的なメンバーシップは、一九世紀半ばから二〇世紀半ばまでアメリカの市民生活の大部分を特徴づけるものであった。

市民世界の変貌

だが、アメリカの市民生活は今では大きく変わってしまった！ 二〇世紀初めのアメリカでは、ウォレン・ダー